

## 特集《大学の知財系コースの紹介》

KIT 虎ノ門大学院における「知的財産×  
ビジネス」教育の特長とその成果

～弁理士の学び直しのために～

会員・金沢工業大学 (KIT) 大学院  
イノベーションマネジメント研究科 教授

加藤 浩一郎

## 要 約

KIT 虎ノ門大学院は、2004 年から約 20 年にわたり知的財産とビジネスを主たるテーマとして教育を行ってきた社会人大学院である。本稿では、その特長と成果を紹介するとともに、弁理士資格を所持して第一線で活躍する実務家として入学され、本大学院で学び直しを実践した 2 名の方を紹介する。

## 目次

1. はじめに
2. KIT 虎ノ門大学院について
  2. 1 設立からイノベーションマネジメント研究科設置まで
  2. 2 2つの学位プログラム (MBA と MIPM)
  2. 3 平日夜間及び土日の授業で勤務を続けながら学位取得が可能
  2. 4 実務・実践を意識した幅広い開講科目と研究指導
  2. 5 約 60 名の実務家教員による少人数教育
  2. 6 とともに学び高めあう社会人オンリーの大学院
  2. 7 先端的な教育システム
3. 教育の成果 (修了生アンケート結果から)
4. 弁理士の修了生からの学び直し体験報告
  4. 1 宗像孝志さん (弁理士法人 武和国際特許事務所 副代表弁理士)
  4. 2 伊藤隆太さん (素材メーカー 知的財産部)
5. おわりに

## 1. はじめに

人生 100 年時代を迎え、世間では「学び直し」や「リスキリング」等の必要性が声高に叫ばれている。もちろん、弁理士も例外ではないであろう。テクノロジーと情報伝達スピードが格段に進化した現在では、知識もスキルも陳腐化するスピードは著しく早くなってきており、昔取った杵柄ならぬ弁理士資格に拘泥していると、あっという間にその人間自体が陳腐化してしまいかねない (自分への戒めを含む)。

弁理士は間違いなく高度専門職の資格であり、知的財産法については高いレベルの知識を有しているはず

である。しかし、このような時代の急速な進化の中では、求められる知識やスキルも変わってきており、弁理士にも IP ランドスケープ (登録商標) への対応や経営コンサルタント的な役割が求められたり、あるいは法律実務自体が新しいテクノロジーやイノベーションに対処する必要性が生じたり、弁理士試験合格やその後の実務経験だけではカバーしきれないこともこれからますます増えてくることが予想される。

このような事態を迎え、何かにチャレンジしたいと考えている弁理士の方も多いのではないか。それに応える選択肢の一つとして、大学院における学び直しがあるので、是非一考いただければというのが本稿の趣旨である。

大学院での学び直しのメリットは、思いつくまま挙げれば、

- ・最先端の知識を体系的なカリキュラムの中で効率的に学ぶことができる
- ・修士号、博士号は国際的にも通用する学位であり、日本国内だけで通用する資格とは異なり、グローバルな観点からも成果を可視化することができる
- ・単位取得及び論文作成という目標達成のためのプロセスが明確化されており、不合格リスクは (弁理士試験のような国家資格に比べると) 遥かに少ない
- ・教員やともに学ぶ学生どうして今までとは異なる人間関係も構築でき、人生に新たな彩りや可能性を加えるができる
- ・大学教員やコンサルタント (業務) 等、新たなキャリアや業務への可能性が広がる

などなど、挙げていけばきりが無い。一方で、当然ながら大学院での学位取得にはそれなりの時間とお金と努力が必要になるのは言うまでもないが、弁理士試験という超難関をクリアしてきた皆さんには特段問題となるレベルとは思われない。

大学院のなかでも知的財産大学院というと、弁理士試験の一部免除のメリットから、弁理士になる前の人が行くところというイメージがあるかもしれない。本学の実績で言えば、もちろんそのような方も入学しているが、すでに弁理士資格を取得して、実務経験も十分積んだ方も毎年のように入学し、学び直しを各自の目的のもとでしっかりと行い、学位を取得して修了し実務に活かしている実態がある。

以下、本稿では、主としてこのような学び直しに興味のある方を対象として、本学大学院の概要や特長とその成果を説明するとともに、すでに入学時に弁理士資格を有しており実務経験もありながら、本学に入学して学び直しを実践し、実務に活かしている2名の修士生の実体験を紹介する。

## 2. KIT 虎ノ門大学院について

### 2. 1 設立からイノベーションマネジメント研究科設置まで

本大学院は、2004年に現在と同じ金沢工業大学東京・虎ノ門キャンパスに設けられた工学研究科知的創造システム専攻から始まったものである。当初から知的財産とビジネスを主たるテーマとする1年制の社会人大学院として、原則として有職社会人を対象として平日夜間及び土日に授業を行い、仕事を辞めなくても学位取得ができる大学院として運営してきた。その後、2009年にビジネスアーキテクト専攻を分離・開設して2専攻体制とし、さらに、2016年には、これらの2専攻を合わせてほぼ同一のカリキュラムを維持しつつ改組・統合し、イノベーションマネジメント研究科イノベーションマネジメント専攻として新たに大学院の設置を行った。

この2016年に設置認可された本研究科は、『イノベーション＝知的財産×ビジネス』と捉え、主たる人材養成目標を高度な専門的知識・能力を持つ高度専門職業人の養成と明確にした上で、「知財のわかる経営人材」「経営のわかる知財人材」の育成を目標とする大学院（修士課程）としたものである。

なお、本大学院を「KIT 虎ノ門大学院」と称して

いるのは、「金沢工業大学大学院」とすることにより所在地が金沢にあるとの誤解が生じるのを避けるためであり、可能な場合にはできるだけこの名称を使用している。

### 2. 2 2つの学位プログラム（MBAとMIPM）

本大学院の最大の特長は、修学内容に合わせて2つの学位を授与できる体制を整えていることである。すなわち、本研究科では、上記の人材の育成目標を踏まえて、主として経営管理について学ぶ者、及び知的財産マネジメントについて学ぶ者の2者が想定されることから、それらに合わせた専門科目をそれぞれ設けるとともに、両者に共通する共通科目を設け、修学の内容に応じて2つの学位

- ・修士（経営管理）：MBA（Master of Business Administration）
- ・修士（知的財産マネジメント）：MIPM（Master of Intellectual Property Management）

のいずれかを取得できる体制とした。

MBAについては、経営学系学位としてグローバルスタンダードの学位であり、ビジネスパーソンのニーズが非常に高い。一方、MIPMは我が国唯一の学位として、特に企業や研究機関などにおける人材育成ニーズが極めて高い知的財産マネジメント人材の育成にフォーカスしたものである。いずれも修学内容及び社会のニーズにマッチした学位が取得できるようにしたものである。そのために、知的財産マネジメント専門科目、ビジネスマネジメント専門科目及びイノベーションマネジメント共通科目として、合計約90科目を開講し、幅広い学びが行えるようにするとともに、実践的なテーマで直接教員から研究指導を受けられるようにしている。

さらに本研究科は、社会人のみを対象とする、学部を持たない独立研究科である、メインキャンパスから離れた場所に単独でキャンパスがある、等の点から社会人ニーズに合わせた柔軟な運営が可能であり、他の大学院にはないユニークな点を多数有する。以下、さらにそれらについて説明する。

なお、2020年4月からコロナ感染症対策のため、授業・ゼミは全てZoomを使用したオンライン形式またはハイフレックス方式（オンライン・対面併用）にて実施し、従来の対面方式と同等又はそれ以上の教育効果を上げており、また学生満足度についても対面と同

様の高い評価を得ている。

### 2. 3 平日夜間及び土日の授業で勤務を続けながら学位取得が可能

本研究科は1年制大学院として認可されており、1年間で学位の取得が可能であるが、社会人は急な長期出張や業務の波などもあることから、そのような社会人特有の事情変化にも柔軟に対応できるように、長期履修制度により最長3年まで在学できることとしている。なお、授業料は単位授業料制としており、在学期間の延長により授業料が著しく増加しないように配慮している。

授業の開講時間については平日夜間、及び土曜・日曜とし、終業後の授業出席を可能として、キャリアを中断することなく、各人の事情に合わせて修学可能な体制としている。

なお、学期についても、社会人のニーズに合わせて4期制としており、8週間で1学期が終わるようにカリキュラムを組んで、社会人が単位を取得しやすいようにしている。

また、入学前の単科の科目履修制度も採用しており、入学前に単位を取得して入学後の負荷を減らすこともできるようにしている。

### 2. 4 実務・実践を意識した幅広い開講科目と研究指導

本研究科は、ビジネスから知的財産までそろえた豊富な科目群を有し、かつそれらはいずれも実務・実践を意識した科目である点が特長である。大学院としての体系的な修学を考慮しながら、最新あるいは最先端のトピックもカバーするべく、毎年科目や担当教員の入れ替えや変更を行っている。

また、本研究科は専門職大学院ではなく研究大学院の形態をとっており、修士研究は必須となる。ただし、アカデミックな内容の研究論文だけでなく、例えば知的財産戦略などの実務的な内容を含むいわゆる特定課題研究によるプロジェクトレポートも学位論文として認めている。研究指導は大きく3つの領域（ビジネスマネジメント領域、メディア&エンターテインメント領域、知的財産マネジメント領域）に分け、それぞれに専任教員を複数配し、院生のキャリアプランに応じた研究指導を行える体制としている。さらに、研究内容によっては領域をまたがって複数の専任教員に

よる指導も受けられるよう、運営は柔軟に行っている。

なお、知的財産に関する国家資格との連携性も考慮したカリキュラム及び研究指導体制となっており、弁理士試験の短答試験一部免除・論文試験（選択科目）免除だけでなく知的財産管理技能検定の一部免除にも対応し、多くの免除実績を有し、弁理士試験にも毎年合格者を出している。

### 2. 5 約60名の実務家教員による少人数教育

本研究科において研究指導に当たる専任教員（14名）は、全員が企業等における実務経験を有し、一部は兼業を認めて実務を行いつつ教育を行っている。また、うち9名は博士号を有しておりアカデミックな研究の指導も行える体制にしている。さらに、弁護士・弁理士等の専門職国家資格を保持する教員や、海外一流校においてMBAを取得した教員も複数おり、充実した専任教員体制としている。

一方、本研究科の取り扱うビジネス・知的財産領域はいずれも広範囲かつ専門性が極めて高い分野も多いため、特に専任教員でカバーしきれない部分については客員（非常勤）教員により授業を行っている。これら客員教員も全員が実務家あるいは実務経験者であり、実務・実践に直接役立つ教育を行っている。

### 2. 6 ともに学び高めあう社会人オンリーの大学院

本研究科の入学者は、原則として大学卒業後2年以上の就業経験を有する者としており、就業経験のない者は受け入れていない。したがって、院生は全て社会人となり、充実したネットワーキングが可能となる。さらに、教える立場からも、新卒者と社会人が混在するクラスは特にビジネスや実務に関するバックグラウンドや前提知識、さらに就学意欲等の違いが大きすぎて、授業のレベル設定をはじめ授業内容、課題評価等が難しく、やむを得ずレベルの低い新卒者に授業レベルを合わせざるを得ない場合が多く、結果として社会人の満足度が下がる傾向があるが、本研究科では社会人に特化した内容とすることができるためそのような弊害がない。

入学者の平均年齢は年度により異なるが、近年はやや上昇する傾向（約40～42歳）がある。また、男女比についても年度により異なるが、概ね7：3程度である。入学者の所属する業界は多岐にわたり、企業規

模も大企業からベンチャー企業、さらには大学や法律特許事務所等までバラエティーに富んでいる。出身大学についても、特定の大学に偏ることなく色々な大学出身者がおり、金沢工業大学出身者は例年1~2名程度である。なお、外国人入学者については、多い年で数名程度であり、入学してみたら留学生ばかりであったというようなことはない。

また、本研究科は2015年に文部科学省「職業実践力育成プログラム (BP)」の認定を受け、さらに教育実績が評価され、厚生労働省より「専門実践教育訓練講座」の指定を受けた。これにより、該当者は現在のところ1年修了で最大56万円の「専門実践教育訓練給付」を受けることが可能となっている。

### 2.7 先端的な教育システム

2004年度の開設当初から本大学院においては大学院教育の実質化の基盤となる教育システムとして「ポートフォリオインテリジェンス」が導入されている。これは、成長目標の達成とそのプロセスを重視した教育を行い、大学院における即戦力人材の育成を実現するためのものであり、他大学や企業からの視察・質問を受けるなど注目を集め、文部科学省の公募事業「大学院教育改革支援プログラム」にも採択された(2007年度)。

また、本学は教育機関として人間力教育も重視しており、その定量化の指標とすべく所定の時期にEQ (Emotional Intelligence Quotient) の測定を行い、ポートフォリオインテリジェンスの一部としている。

### 3. 教育の成果 (修了生アンケート結果から)

ここで、本学における教育の成果を示すべく、昨年度修了生を対象に行ったアンケートの結果の一部を紹介する。

まず、この調査の概要は以下のとおりである。

調査実施日：2021年12月11日(土)~2022年1月5日(水)

対象者：KIT 虎ノ門大学院を2016~2020年に修了した者(153名)

対象者年齢：平均42.3歳(※入学時参考)

調査方法：インターネットによるアンケート形式

回答率：38.3%(57回答/153配信)

このアンケート調査では、KIT 虎ノ門大学院がどのような価値を提供し、結果的に修了生のキャリアに

どのような影響・変化をもたらしているかを調査することを目的とした。

このアンケートの結果、以下のようなことが明らかになった。

まず、KIT 虎ノ門大学院を修了した回答者の98.2%が、修了後あるいは在学中の自身のキャリアにおいて、平均して2つ以上のポジティブな効果があったと回答している。多くの回答が得られた効果項目は、順に「社内外の評価が上がった」(40.4%)、「収入(年収)が上がった」(38.6%)、「趣味・教養に役立った」(38.6%)、「転職に役立った」(36.8%)であった。内訳は、以下の図1の通りである。

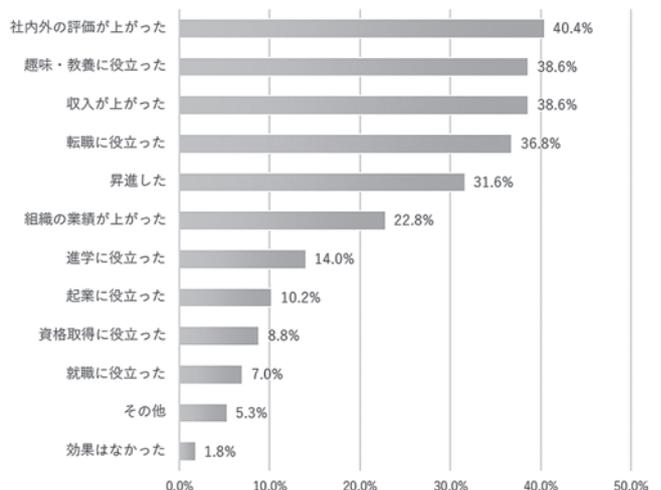


図1 修学の効果についての回答内訳 (複数回答可)

また、これら効果があった時期は、「在学中」が43.6%、「修了から半年以内」が21.8%、「修了から2年以内」が29.1%と回答しており、比較的早期にキャリアに関するポジティブな効果が得られたことが分かった(図2)。

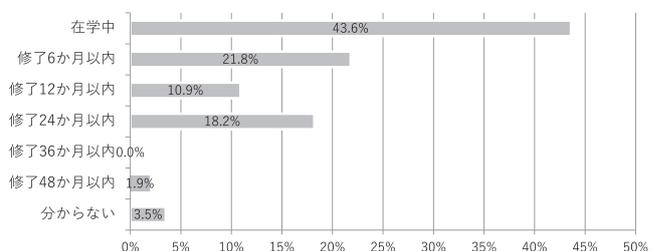


図2 修学の効果があった時期 (択一回答)

さらに、収入(年収)が上がったと回答した修了生の平均年収増加額は228.8万円(※「増加額500万円以上」は500万円とした)であり、これらの者は在学中から修了後約2年以内に平均してほぼ学費と同等のリターンを得ていることが明らかとなった(図3)。

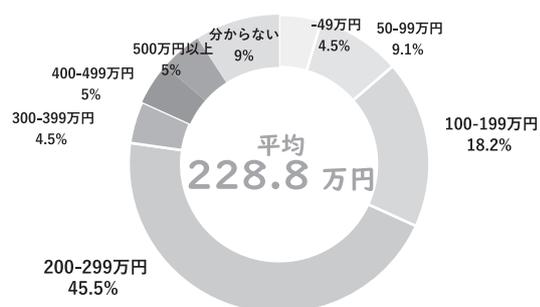


図3 年収増加額分布

また、「希望する他部門へ異動できた」という回答者は14.0%、「希望する他社へ転職できた」という回答者は22.8%で、計36.8%が、在学中からほぼ修了後2年以内に希望するキャリアチェンジを実現していることが明らかとなった。

本大学院に対しては、回答者の94.7%が「修了後も学びたい」、91.2%が「学び直しを考えている社会人に紹介したい」と回答した(図4)。また本大学院について94.7%が「社会人のための学び直しの教育機関として有益」と考えていることが明らかになった。

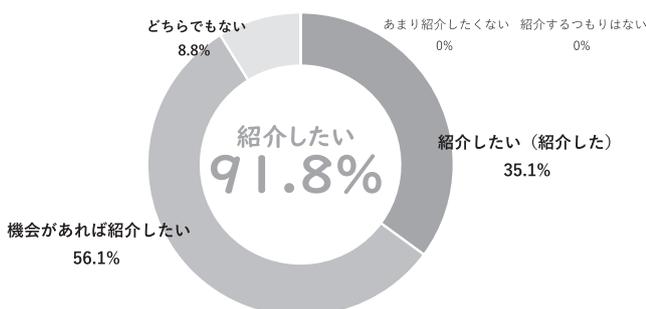


図4 学び直しを考えている社会人にKITを紹介したいですか(択一回答)

#### 4. 弁理士の修了生からの学び直し体験報告

以下では、入学前から弁理士資格を有し、本大学院を修了した2名の方に、簡単な自己紹介とともに、本大学院への入学目的、学んだ内容、修了後どう役立っているか等について原稿をお願いしたところ、快く引き受けていただけだったので、その内容を紹介する。

##### 4.1 宗像孝志さん(弁理士法人 武和国際特許事務所 副代表弁理士)

###### (1) 簡単な自己紹介

社会人の当初は通信事業会社でシステムエンジニアをしていました。その後、縁あって都内の特許事務所へ転職し、国内出願代理業務の補助をしつつ2012年度(平成24年度)の弁理士試験に合格しました。

当時の勤務先は所長を含め4名だったので、担当する仕事は多種多様であり、特実意商の全ての事案に関わらせていただきました。特に、クライアントとディスカッションを通じて出願内容を検討する機会も多く、クライアントの動機(なぜ、知的財産を取得しようとするか)を直接聞きながら、その目的に即した出願内容になるように心がけていました。

###### (2) 本大学院への入学目的

受験勉強を通じて法律の知識を得ながら、クライアントの「法律を利用して知的財産権の取得をしようとする動機」も意識しながら日頃の業務を行っている、「自分が作成している書類で、本当にクライアントの要望が叶うか?」という思いや、クライアントの事業において特許権取得の効果は実際にはどの程度なのか?などの疑問を持つことが増えていました。

特に、弁理士登録をしてからは、「クライアントの事業に資する知的財産権とは、どういうことなのか?」を知りたくなり、事業(ビジネス)と知財の両方を学べる機会が必要と考えるようになりました。

さらに、受験勉強の範囲を超えて、知的財産に関わる法制度をより広く学ぶことも「知的財産の専門家」たる弁理士として必要と思い、法律の学び直しと、企業の知財戦略を学ぶことができる、KIT 虎ノ門大学院工学研究科知的創造システム専攻(当時)に入学しました。

###### (3) 学んだ内容

法律に関する授業として、諸外国の法制度(米国、欧州、韓国、中国)や、グローバルな視点からの「知的財産の保護・活用」に関連するものを履修しました。

また、知的財産戦略に関する授業として、大手企業の知的財産部門の責任者を経験されている講師による、具体的な経験に通じた「企業の知的財産戦略の実際」や、実ビジネスの研究から明らかになった知的財産戦略の事例を通じて、知的財産戦略の成否に関わる要素についても学びました。なお、個人的に最も興味深かった科目は「技術標準化と経営戦略」という科目で、技術の標準化と経営戦略を関連させることの重要性を学ぶことができました。

また、エンターテインメント産業を軸にした産業論や権利マネジメントの科目、企業財務・会計の基礎的なもの、知的財産価値評価、特許ライセンス、産学官

連携と知的財産の関連、など多岐に渡る内容を学ぶことができました。

#### (4) 修了後どう役立っているか

クライアントからの相談に対し、法制度の観点からのみではなく、多様な観点から助言できるようになりました。例えば、具体的な発明の出願に関する相談であっても、その発明を利用した将来的なビジネススキームを想定し「標準化への取り組み方はどう考えるか」や「知的財産権の利用をどの範囲で想定するか」、または「価値の最大化を狙う知的財産権の戦略をどう考えるか」など、出願代理業務の範囲を超えることまで網羅したディスカッションもできるようになったことで、従来ではいただかなかった相談もいただくようになりました。

そして、「共同研究・開発を前提としている際のライセンス内容のアドバイス」や「標準化が個別事業に与える影響を念頭においたクレームドラフティング」などは、多様な授業で得た知識を利用させていただいております。

このように、多様な授業を通じて得た知識をキッカケにして、広く様々なことにアンテナが立つようになり、情報収集力も高まったと実感しています。

また、最も役に立っていることを挙げるならば、多種・多様・年代を超えた人脈を得られたこと、その人脈は今でも活かしていることです。同期生、同窓生には様々な分野で活躍されている方が居ます。日常業務だけでは決して縁がなかった方とディスカッションをする機会に恵まれると、自分の視点・観点の狭さなどを再認識することができ、その後の業務に良い影響をもたらしてくれています。

自分の当初の目的である「クライアントの事業に資する「知的財産権」とは、どういうことなのか？」の回答は未だ出ていませんが、この疑問を探究し続けるキッカケや手段を KIT 虎ノ門大学院で得たことで、その後は自発的に様々な学びの場にも参画して、自らの研鑽を積んでいくことへの土台をいただいたと思っています。

## 4. 2 伊藤隆太さん (素材メーカー 知的財産部)

### (1) 自己紹介

大学卒業後、大手電機メーカーに就職。R&D 部門に配属となって約 10 年間、ソフトウェアサイエンス

関連の研究開発に従事。その後、希望して知財部に異動し約 20 年間主に出願権利化の業務に従事。その間に弁理士資格を取得。その後、大手材料メーカーの知財部に転職。現在の業務は、知財戦略の立案など。

### (2) 入学目的

長らく社内の技術者の発明提案を出願権利化するという業務を行っている中で、自分が中間処理をして取得した特許は本当に事業に貢献できているのだろうか？という疑問が湧いてきた。と同時に本来、知財権は経営・事業戦略を実現するツール（手段）として機能すべきであるという、ある意味当たり前のことに気づいたことが直接的なきっかけ。それまで自分の興味のあるビジネス書を手にとって自己流で経営・事業戦略を勉強していたが、専門の大学院で体系的に勉強したいという気持ちが強くなり入学を決意した。特に KIT 虎ノ門大学院は、知財と経営の双方を融合的に学ぶことがカリキュラム的に可能であることが自分にとって魅力的であった。なお当時の職場から近く平日の夜でも通いやすいことも決め手になった。

### (3) 学んだ内容

目標を MBA 学位取得としたコースを選択。戦略思考、企業戦略、技術経営、財務・会計、マーケティング、交渉学、アントレプレナーシップ等、とにかく貪欲に幅広く学んだ。授業では受講者同士の議論が中心で、小グループに分かれて互いの意見をぶつけて議論しながら課題をこなしていくスタイル。数十年前に座学が中心で、実験以外は先生の黒板の文字をノートに書き写していた時代の大学を卒業した身として、議論中心の授業スタイルに最初は大いに戸惑ったが徐々に慣れていった。自分より若い方が多くグループに分かれての議論は大変有意義であった。なお、KIT は知財関連の講座も充実しており、産学連携、IP ランドスケープ、知財戦略、契約、標準化関連の講座を受講した。知財業界の第一線で活躍されている先生の講義は非常に勉強になった。

### (4) 修了後どう役立っているか

現在、勤務している知財部の業務は知財戦略立案が中心になっている。事業に資する知財戦略を立案するには、まず事業部の考える事業戦略を正しく理解する必要がある。その為、日々、事業部担当者とは話しな

がら、事業戦略をヒアリングして理解することが求められる。その際、KIT で学んだ知識が活かしている。MBA コースで学んだ知識をフル活用し、どのような事業環境なのかをビジネスフレームワークに落とし、考えることが当たり前のように自然にできるようになった。事業戦略を正しく理解した後は、知財戦略の立案を検討するフェーズになるが、ここでも KIT で学んだことが活かしている。例えば KIT で学んだ標準化、IP ランドスケープなどの知識を活かして、調査分析を行い、事業に資する知財戦略の検討ができるようになったと思う。

## 5. おわりに

基本的に弁理士にはまじめな方が多く、本大学院で

も単発のセミナーや講演会を開くと多くの方が参加される。このようなセミナーは世の中で数多く開催されており、最近はオンラインのものも多いため参加は容易である。しかし、有料・無料を問わずこのような単発のセミナーにいくら参加しても、知識は断片的にしかならず、さらに形として成果を表すことはできないため達成感も得られないのではないだろうか。学びの意欲が高いにも拘らずそのように感じている方は、思い切って大学院にチャレンジすることをお勧めしたい。

本稿が大学院での学び直しを目指す方のお役に立てば幸いである。

(原稿受領 2022.8.30)